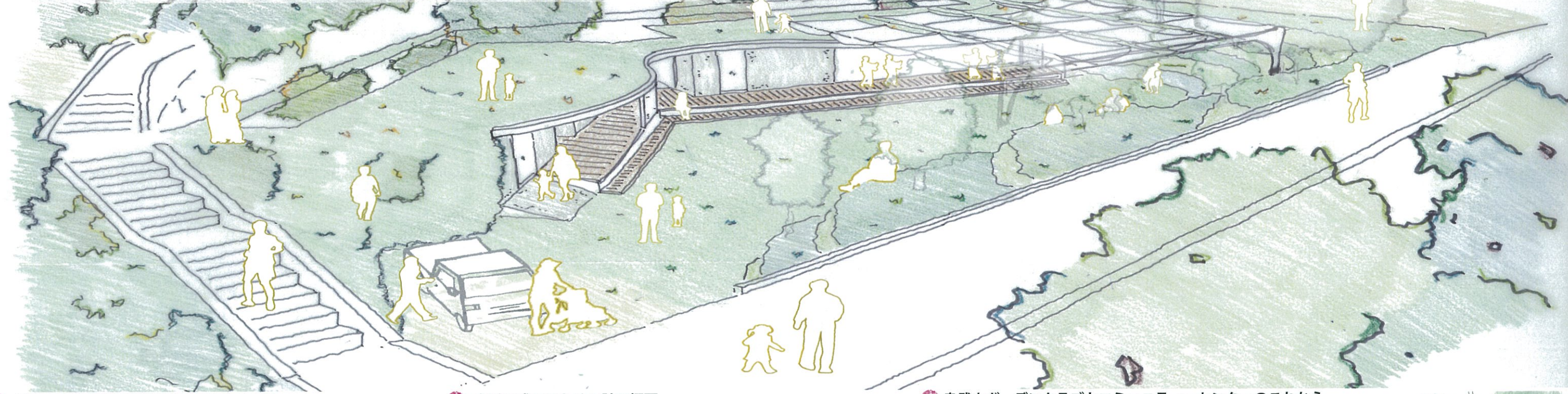


グザティムにいだかれるコミュニティセンター

「いちゃりば (出会い交流する)」+「がんじゅ〜 (健康・元気になる)」

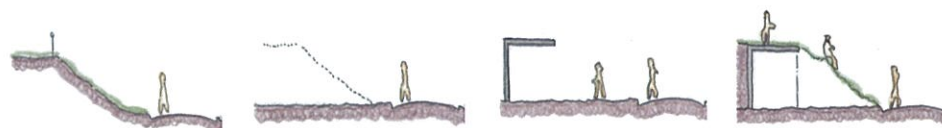


健康と交流を発展させるためのコンセプト

奥武山公園は運動公園として充実した機能を有しており、年間56万人以上の人々に利用されている。利用者の多くからは「健康増進のための公園」と認識され、日々の運動に活用されている。ところで、『健康』とは『心』・『身』ともに満たされた状態を指す。利用者の健康のため、運動公園としてだけでなく、同様に『心』の充足を得るための機能も発展させるべきではないか。市民協働やサークル活動といった人との交流、自然との触れ合いが『心』の充足へのきっかけとなることから、本計画では『出会いと交流 (いちゃりば)』を促し、『健康づくり (がんじゅ〜)』を促進するコミュニティセンターを提案する。

身近に感じるための計画概要

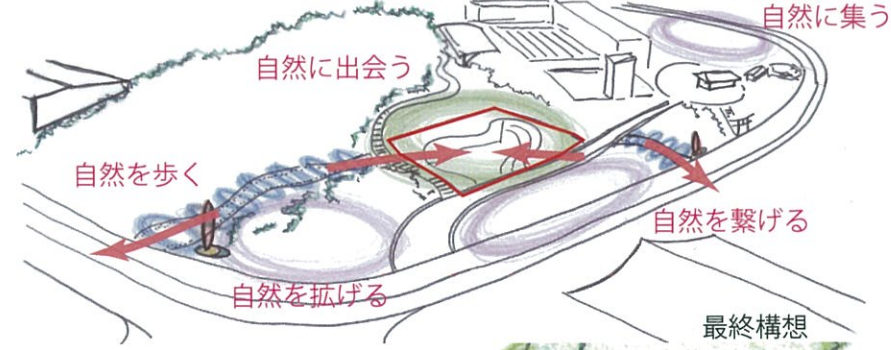
建設予定地はウォーキングコースからは隠れた位置にあり、高低差があることから視認性が低く気づかれにくい空間となっている。当計画では、この問題を改善するため、以下の工程を行う。



現状敷地 → 『掘る』 → 『植える』 → 『結ぶ』
建物を『植える』ことで敷地の視認性とアプローチの容易さを確保し、人々が気軽に利用できる身近な空間をつくる。

奥武山ガーデンクラブとコミュニティセンターのこれから

フェーズ1：ガーデンクラブによる「仮：みんなの庭」整備・供用開始
フェーズ2：コミュニティセンターの整備 + ガーデンクラブの活動拡大
フェーズ3：ガーデンクラブの活動によりコミュニティセンター周辺が整備され、緑で覆われ自然と同化する。



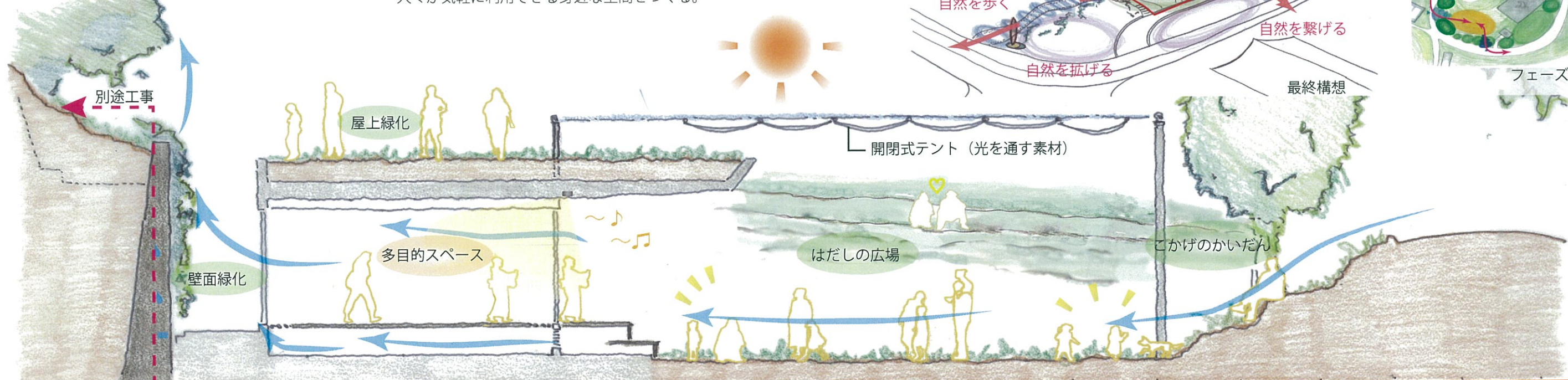
フェーズ1

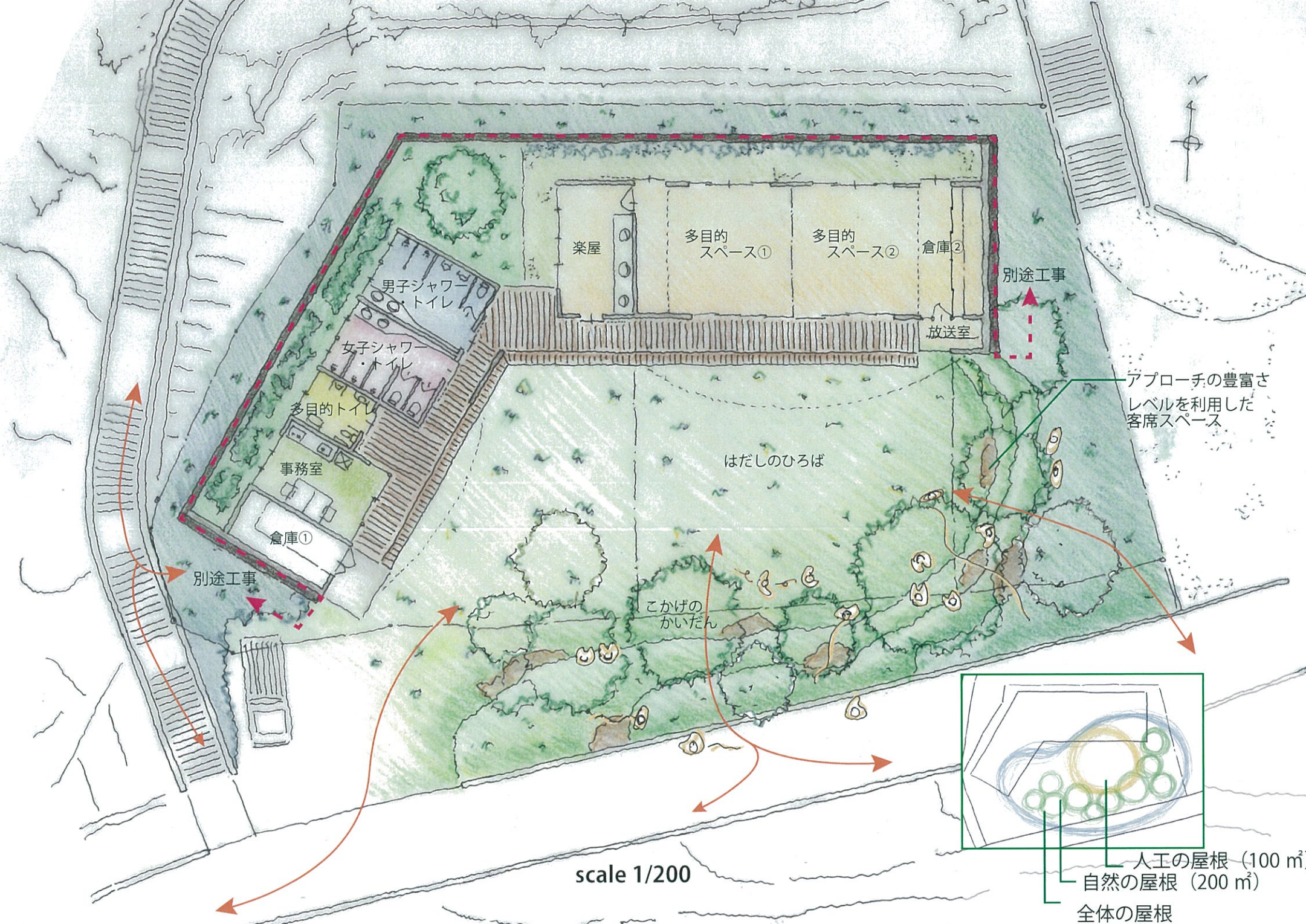


フェーズ2



フェーズ3





—比較表—

項目	植える案	生ける案
計画レベル アプローチ	 ウォーキングコースの高さに合わせて敷地を掘りこんでおり入り口が明快でありアプローチしやすい	 ウォーキングコースよりも敷地が高く、建物へ至るまでに長い坂道がありアプローチしづらい
コスト	○ 造成部分のコストが掛かるため割高となる (別途工事)	◎ 造成部分のコストが掛からない
工期	○ 建物の建設工事に加え敷地造成のための工期を要する	◎ 建設工事に必要な工期を要する
緑地面積	◎ 建物は地中にあるため、緑地面積が大きく活用の幅が広い	○ 建物の分、緑地の減少まともった緑地面積の確保が難しい
半屋外空間	◎ まとまった空間を確保しながら、斜面地の活用が可能	○ 斜面地の活用が困難である
安全性	◎ ウォーキングコースから視線があるため、安心感を得られる	○ ウォーキングコースから死角となっており、安心感を得られない
総評	コスト・工期については工夫を要する完成後は、良好な視認性を確保し明快なアプローチより、立ち寄りやすい施設となる	コスト・工期は納まるアプローチと視認性に難があり、利用者にとって利便性が良くない

—面積表—

・多目的スペース① (舞台袖含む) …40.6㎡	・女子トイレ・シャワー …17.5㎡
・多目的スペース② (舞台袖含む) …40.6㎡	・男子トイレ・シャワー …17.5㎡
・倉庫② … 8.7㎡	・多目的トイレ … 7.5㎡
・楽屋 …19.2㎡	・事務室 …17.5㎡
・放送室 … 4.5㎡	・倉庫① …12.5㎡
	敷地面積…839.3㎡
	屋内床面積…186.1㎡
	・屋外共用廊下 … 57.3㎡
	・はだしの広場 …約 270.0㎡

◎ 構造の工夫

地震、台風などの自然災害に強い計画
壁式コンクリート構造とし、比較的厚い壁にて構成することで、高い耐震性を得る。

フレキシブルな空間計画
比較的厚いスラブと壁にて空間を構成する。
多目的スペースに必要とされる、柱、梁のないフレキシブルな空間を可能にする。

構成部材について
スラブは、パイプを配し中空構造とした中空スラブとする。
これにより、自重の軽減や断熱効果を得る。
また、スラブと壁を一体とし、強固な構造とする。

◎ 設備の工夫

空調負荷の軽減
建物が地中に在り、更に屋上緑化を施すことで、断熱効果を得ることから、躯体の温度を安定させることができる。

湿気の対策
床下に木炭を敷くことで、調湿を図る。また、木炭の吸着作用にて空気を浄化する。

地下水を利用した壁面緑化
土留めを兼ねたライトコート(壁面)には地下水の一部が染み出してくることが予想される。
地下水を利用し、プランターの仕組みを設けることでライトコートの緑化を図る。

◎ 大屋根について

コスト
本計画において、舞台前の前庭に300人を収容する大屋根を設けるにあたり、概算金額を求めると総予算の過半数を占める金額となった。この条件で大屋根を設けるのであれば、本計画自体を予算内で実現するのは困難であると言える。

木々を活用した屋根の提案
前庭空間に100名ほどを収容可能な開閉式のテント屋根を設け、残りの200名はテント屋根周囲に植栽される木々のこかげを利用する。(こかげのかいだん)
テント屋根を開閉式とするのは、日常の場面においては前庭を自然光に溢れるオープンな空間とし、イベント時や雨天時には屋根がかかる仕組みを設けるためである。

◎ 木(もく)を用いる

木(もく)は内装材やウッドデッキ等の仕上材の他、植栽を屋根として用いる。

木々を前庭テント屋根を囲むように配置することで舞台を望む客席や木陰の落ちる憩いの場所など、多面的な魅力をもつ自然の屋根下空間へと成長していく。

コミュニティーセンターを囲む木々は人々を誘い、人々は木々を慈しむことで相互に影響を与え、建物を覆い自然との同化を果たす。
やがて訪れた人にとって、『クサティムイ』にいだかれるコミュニティーセンターとして親しまれる。